

# Eureka VI

六年制通信 No. 7 平成30年6月2日(土)号

## 朝の読書から

いつの間にか朝の目覚ましが必要になってしまった。夜中に何度も目が覚めるようになってしまった。疲れがあるのかないのかも自覚できなくなってきた。そんなことを父親から聞かされたのは、ちょうど現役引退間近、今の私くらいの年齢の時だったような気がします。父は朝の散歩で時間をつぶしていたらしいけど、私は運動が苦手なので、仕方ないから書斎でコーヒーを飲みながら本を読んでいます。他にやることがないのですが、これがけっこう楽しい。最近は新しい本より古い、一度読んだものや買っただけで積んであるものに手を出しています。

このところ毎朝、前回紹介した吉田満の『「戦艦大和」と戦後』(ちくま学芸文庫)を繰り返し読んでいます。考えさせられることばかりなので、なかなか止められないわけ。例えば「戦没学徒の遺産」にこんなことが書いてあります。「私はいまでも、ときおり奇妙な幻覚にとらわれるときがある。それは、彼ら戦没学徒の亡霊が、戦後二十四年をへた日本の上を、いま繁栄の頂点にある日本の街を、さ迷い歩いている光景である。

(中略)彼らが身を以て守ろうとした‘いじらしい子供たち’は今どのように成人したのか。それを見とどけなければ、彼らは死んでも死に切れないはずである」と、さらに「彼らの亡霊は、いま何を見るか、商店の店先で、学校で、家庭で、国会で、また新聞のトップ記事に、何を見出すだろうか」と続けています。この豊かな自由と平和を単に自己の利益のために享受しているとしたら彼らはどう思うか、とも書いています。こういうのを朝から読んでいると、普段は考えないことを少し深く考え込んでしまいます。吉田さんは戦後二十四年を「繁栄の頂点にある日本」と表現しています。それでは戦後七十年をへた今の日本の繁栄はどう表現すればいいのでしょうか。あの頃より、少なくとも物質面では格段に繁栄しているのですから。

私は戦争を知りません。テレビで田原総一郎という評論家が「俺たちは戦争を知っている」と言っていましたが、正しい言い方ではありません。あの世代も知らないはず。昭和9年生まれが戦争を体験しているはずがない。貧しかった戦後の日本を知っているだけです。戦闘員として戦争に参加しているわけではありません。広島や長崎の原爆記念館では原子爆弾の恐ろしさを知ることができますが、戦争というものがどのようにして起こり、なぜ簡単にやめることができなかつたのか、といった問いには答えてくれません。平和教育とはどのようなことを言うのか。吉田さんの本を読むと、「君は間違っているのではないか」と問われている気がして仕方ないのです。今朝でいったん吉田さんの本は終えましたが、私は考え続けることにします。

そういえば、新聞のトップ記事で思い出しました。アメリカンフットボールの前監督さんたちが除名されたとか載っていましたね。何度もニュースで流れましたから、私もあのタックルは見ましたが、アメフトというのはボールを持っていない選手にもタックルをしていい、非常に危険な競技くらいにしか認識していなかったもので、私はあれを反則とは思いませんでした。しかし、やっぱりあれは競技としてもルール違反だったのですね。観たことも関心も、従ってルールも知らない競技に対しては、私程度の認識の人もいたのではないかな。ただ、あの試合にも審判がいたのでしょうか、一発退場にはなっていないかと思うのですが、ということはあのタックルは「悪質な反則」と判定されない程度のプレーということになりませんか。あの審判はおとがめなしでいいのかなあ。これまた素人の感想なのかもしれませんがね。QBの父親が泣いていたので、再起不能の大けがなのかと思ったのですが、軽症でよかったですね。すぐ復帰できたようですし。

ルール違反もさることながら、スポーツ中継で、私の目にはマナー違反にしか映らないことも多いように思います。勝った瞬間、相手とちゃんと握手をする前に床に寝転んでガッツポーズをしている選手を見ると、情けなくなります。我が四大綱の「相手に敬意を持つ」を、君たちだけは忘れないでくださいね。

#### 今週のおすすめ

・堀 秀彦 『銀の座席』 (朝日文庫)

堀秀彦といえば、東洋大学の学長というよりは、私たちの世代にはラッセルの翻訳者として有名な先生でした。バートランド・ラッセルの『幸福論』『教育論』『怠惰への讃歌』は、私の世代で英語を学んだ人なら皆読んでいたはずですが、原文に忠実な訳だったと記憶しています。

この『銀の座席』は、今から40年以上前、老人となった一人の学者が老いと向き合って書いたエッセイです。銀の座席とは電車などのいわゆるシルバーシートのことですね。若い君たちには書かれている内容はほとんど理解できないかもしれませんが、それは実感を伴わないのだから仕方ないとして、老先生の文章は味わえるように思います。私にもよくわかる部分と、そうかあ、やがてそういう風を感じるようになるのかと気づかされる場所があります。年を取ってみないとわからない、そしてお前もやがて年を取る、そう言われているような気がしました。

また、言葉に鋭敏な先生らしく、勉強になる記述もたくさんありますよ。「執着」の読み方に二通りあって、それぞれ意味が違うというのも初めて知りました。広辞苑で調べてごらんください。「しゅうちゃく」と「しゅうじゃく」です。

先生は繰り返しモンテーニュの『随想録』から、様々な引用をしています。このエッセイの連載中、ずっと読んでおられたのですね。400年も前に他国で書かれた本に心惹かれるというのは、考えてみれば人間の本质には空間的な隔たりも時間的な隔たりもないということかもしれません。進歩していない、ということ、かな。

BGMは惣領智子の 終わりのない歌 でした…。